

文・編集・発行 / 斉藤新緑 Tel (0776-82-1141) Fax (0776-82-2261)

【斉藤新緑事務所】〒913-0046 福井県坂井市三国町北本町2-1-20 京福三国ビル2F

【e-mail】sinryoku@aurora.ocn.ne.jp

【ホームページ】http://www.ss.apdw.jp/<さいとう新緑で検索可>



ほっとらいん

VOL. 53



最初の質問

長田 弘

今日、あなたは空を見上げましたか。空は遠かったですか、近かったですか。雲はどんなかたちをしていましたか。風はどんな匂いがしましたか。あなたにとって、いい一日とはどんな一日ですか。「ありがとう」という言葉を、今日、あなたは口にしましたか。

窓の向こう、道の向こうに、何が見えますか。雨の霽をいつぱい溜めたクモの巢を見ることがあります。櫨の木の下で、あるいは樺の木の下で、立ちどまったことがありますか。街路樹の木の名を知っていますか。樹木を友人だと考えたことがありますか。

このまえ、川を見つめたのはいつでしたか。砂のうえに坐ったのは草のうえに坐ったのはいつでしたか。「うつくしいと、あなたがためらわず言えるものは何ですか。好きな花を七つ、あげられますか。あなたにとって「わたしたち」というのは、誰ですか。

夜明け前に啼きかわす鳥の声を聞いたことがありますか。ゆつくりと暮れてゆく西の空に祈ったことがありますか。何歳のときのじぶんが好きですか。上手に歳をとることができるとおもいますか。世界という言葉で、まずおもしろい風景はどんな風景ですか。

いまあなたがいる場所で、耳を澄ますと、何が聴こえますか。沈黙はどんな音がしますか。じつと目をつぶるすると、何が現れますか。問いと答えと、いまあなたにとって必要なのはどっちですか。これだけはしないと、心に決めていられることがありますか。

いちばんしたいことは何ですか。人生の材料は何だとおもいますか。あなたにとって、あるいはあなたの知らない人びと、あなたを知らない人びとにとって、幸福って何だとおもいますか。時代は言葉をないがしろにしている——あなたは言葉を信じていますか。

えたい 得体の知れぬ東洋人

近年、つくづく、一人の人間が持っている生涯の時間というものは、

(高が知れている……)
と、おもわざるを得ない。人間の欲望は際限もないもので、あれもこれもと欲張ったところで、どうにもならぬことは知れている。一つ一つの欲望を満たすためには、金よりも何よりも、それ相応の「時間」を必要とする。

一を得るためには、一を捨てねばならぬ。時間のことである。人生の持ち時間こそ、人間がもっとも大切にいつかわなくてはならぬ「財産」だともいう。私の場合、若いうちに、それを知ったつもりになったことが、いまになってみるとさうい

わいだつたのである。三日に一度ほどは、ぼんやりと自分が死ぬ日のことを考えてみるのは、徒勞でもあらうが、一方で、自分の中の過剰な欲望を打ち消してくれる効果もあるのだ。

こうして、いまの私は、なるべく自分の死に親しみを抱えてゆきたいと願っているが、むずかしいものだ。死そのものを考えるのではなく、死を最後の目標として、その道程

を考えるようにしている。道程とは、それまでの一日一日のことだから、その日いちにちの充実を、まず、こころがけている。

これもまた、むずかしい。むずかしいが、想わぬよりも想っていたほうが、はるかに日々は充実する。これも、まぎれもないことだ。(池波正太郎)

「鬼平犯科帳」の主人公、火付盗賊改め役・鬼平こと長谷川平藏が好きなのは、演じた中村吉右衛門がピタシのはまり役だったこともあるが、作者の池波正太郎のこうした人生観がに

じんでいたからだと思う。ちかごろの日本は、何事にも、「白でなければ黒。黒でなければ白……」である。

その中間の色合が、まったく消えてしまった。その色合こそ、「融通」というものである。

政治にも社会にも、家庭にも、この融通のモラルが、自と黒の間に、流動化する日本人の心として存在していたのであつた。

戦後、輸入された自由主義、民主主義は、かつての日本の融通の利いた世の中を、たちまちにもみつぶし、融通とい

う美德を、「なれ合い」という悪徳にしてしまったが、「融通」とは、「滞りなく通ること。臨機応変に、また、即座に頭をはたらかせて事処理すること」と辞書にある。

大正から昭和にかけての日本人は、どうも、収支の感覚が鈍くなつてしまったような気がする。

収支といつても金銭のことのみをさしているのではない。何事にも、「入らぬものへ、入れてしまふ」のである。「出してはならぬものを出してしまふ」のである。入るものと出るもののバランスが、わからなくなつてきてしまった。たとえば小さな島国へ、大陸のみが必要とした文化を、めつたやたらに採り入れて身うごきができなくなつてしまふ。

いまや、日本を囲む海洋は、国際関係上の防波堤でも何でもなくなった。異国の文化を、わがものにするための余裕を海はもつていたのだが、それもなくなった。

科学と機械の文明の中で、せまくて小さな日本の国にふさわしいものだけを採り入れることができぬかぎり、日本人の「家」は、すべて、ほろび消えるであろう。

そのあとには、得体の知れぬ東洋人が生き残り、まったく別種の国体を造りあげるのかも知れぬ。

不安な時代を考える

(一) 暴走する文明

マンモスを一頭ではなく二頭殺すことをおぼえた旧石器時代のハンターたちは、進歩をなした。しかし、群れ全体を断崖絶壁から追い落とすとして二百頭いっぺんに殺すことをおぼえたのは、進歩しすぎだった。彼らはしばらく羽振りのいい生活を

送ったが、そのあと飢えてしまった。世界各地の砂漠や密林に散らばる巨大遺跡の数々は、進歩という畏の記念碑であり、みずからの成功の犠牲になった文明の墓標である。かつては壮大で、複雑で、栄華に輝いていたそれらの社会の命

運こそ、私たち自身にとつて最良の教訓だろう。

墜落した諸文明のフライトレコーダーを調べれば、真の持続可能性がまったく別の方向にあることがわかる。必要なものは、過去の過ちを繰り返さない分別と勇気ということなのだ。

とでは歯止めをかけられない。暴力は、不公正、貧困、不平等、他の暴力といったものによつて育まれる。二十世紀の前半、私たちはおよそ八千万人の命を引き換えに、この教訓を痛みとともに学んだのだった。

なんでもありの自由競争がはじまり、地球を丸裸にしつつある。二十世紀の百年間に世界人口は四倍、経済は四十倍以上に増大した。もし近代の約束が曲がりなりにも守られていたら、全人類はいまより十倍ましな暮らしをしていたらどうか。ところが今日、絶望的な貧困に苦しむ人の数は、一九〇一年の世界人口と同じなのだ。

「考えない国民を持つ支配者はなんと幸運なのだろう」。アドルフ・ヒトラーは一度、うれしそうに声を上ずらせたという。しかし、支配者たちまで考えなくなったら、どうすればいいのだろうか？

今の日本は大きな取り返しのつかない曲がり角が近づいたような気がしてならない。

九・一一後の世界が「テロとの戦い」を掲げて逆上するアメリカにより、「自国利害中心主義」、「妥協なき国益の主張」が交錯し、冷たい空気が漂っている。

▼よく、愛国主義は「悪党どもの最後の避難場所」といわれるが、それは独裁者の最初の手段でもある。外敵を怖れる人びとは操られやすい。本来、社会を保護するはずの武人階級は、おうおうにして保護を騙つたゆすり屋と化す。戦争や危機に直面すると、安全という約束のもとで、権力は、少数者によって多数者の手からやすやすと盗み取られてしまう。外敵が架空で得体の知れないものであればあるほど、でつち上げの同意が得やすくなる。

▼英語で愛国心にあたるものに、ナショナリズムとパトリオティズムがあつて、二つはまったく異なるようだ。ナショナリズムとは通常、他国を押しつけてでも自国の国益を追求する姿勢であり（国益主

義、パトリオティズムは、祖国の文化、伝統、歴史、自然などに誇りをもち、それをこよなく愛する精神であり、祖国愛、郷土愛といえるようだ。

九・一一後の世界が「テロとの戦い」を掲げて逆上するアメリカにより、「自国利害中心主義」、「妥協なき国益の主張」が交錯し、冷たい空気が漂っている。

こういう空気になると、より強く近隣を批判することが愛国的であるという方向に走り、協調を主張する者を「非国民」として排撃する雰囲気醸成される。それは戦争に向かった日本の戦前の空気に似ている。より強い言葉そして暴力へとエスカレートし、「断固として妥協せず」と「自縄自縛になつていったあの道である。

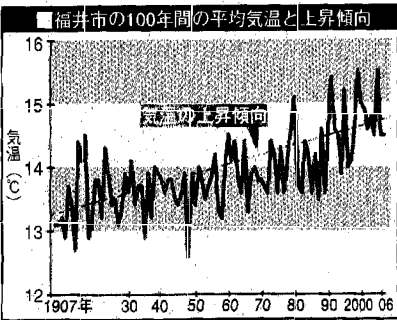
気温1度上昇なら冬でも雨

70年後には
雪降らず

県民福井07/1/22

福井市の平均気温は、ほぼこの百年で一・四度上昇。この数値は本県から約二百km南に位置する和歌山県の百年前の平均気温。

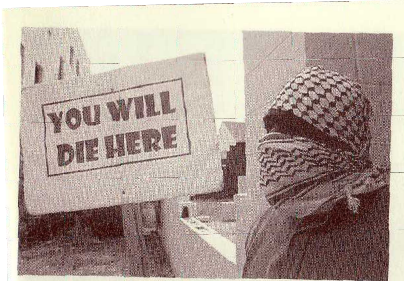
温暖化「敏感な福井」



十二月、三月の福井市の平均気温はこの十年間、五度前後で推移。六度なら雨、四度なら雪、ということで、気温一度上昇なら雨。温暖化の影響は大きい。

第一に、テロリズムは飢餓や病気や気候変動に比べれば小さな脅威だ。あの日、アメリカ合衆国で三千万人が命を落とした。全世界では、汚染された水のせいで毎日二万五千人が死んでいく。毎年、栄養不良のために二千万人の子どもたちが精神障害になる。毎年、スコットランドより広い農地が、主にアジアにおいて土壌流出と都市化で失われる。

第二に、テロリズムは原因をさておいて症状を追いかけること。古い考え方を新しい包装紙に包み、それを使って、選挙で成立する政府から選挙の洗礼を受けたい企業へと権力のテコを移動させようとする。そのため、メディア内部にいる太鼓持ちたちが、その目的を「減税」や「規制緩和」として売り込んだのだ。



第二次世界大戦後、世界大戦後、しかるべき国際機関を創設し、暴力の根源にメスを入れようという合意が形成された。

そうした戦後の合意を突き崩し、時代遅れの政治手法を蒸し返すのは、血塗られた過去へ戻るうとしていく。

ミサイル防衛計画というふとどきな浪費のために予算化された資金よりずっと少ない。この計画は、実効性も必要性もないけれど、新たな軍拡競争と宇宙の軍事化をもたらしかねないしろものである。

結局 誰が一番得をして 誰が一番困っているのか

(四)自由化と規制緩和が招く空洞化

私たちの日常は矛盾に満ちている。消費者に対しては「安い」ことをウリにする宣伝があふれているのに、日本経済という規模になると、消費者物価が下がるデフレはダメだとされる。

デフレを脱却するために、企業にも消費者にも、もっとお金を使わせなければいけない、というのだ。政府も大企業も、それが省資源や環境保全と完全に矛盾していることについては自問しない。それどころか、政府と大企業が力を入れているのは、海外の激安商品をもっと国内に入れるための貿易自由化である。

市場に安い商品が流入し、そのせいで生産者や労働者の手取りが切り下げられ、その結果、安い食品と日用品へのニーズがますます高まるという悪循環が生じている。農業と地場産業は解体の危機に瀕しており、地域経済全体の落ち込みも著しい。

一連の政策の恩恵をもっとも受けているのが、巨大なショッピングモールやコンビニ・チェーンを経営する大手小売業である。もちろん、それ以外にも、大きな企業ほとんどが、貿易自由化と規制緩和を要求しな

がら、同時に、公的資金による企業支援のための(国内外の)インフラ整備という保護(産業振興)政策を公然と求めている。

たとえば、円高を受けて海外に工場を移した企業、海外からの安い食材・資材に依存する国内の食品加工メーカーや外食産業、海外に日本から種と栽培・加工・輸送のノウハウを持ち出し、日本向けの食料を安くつくらせて逆輸入する食品商社など。

その逆に、生活者一人ひとりと中小事業体は、自由化と規制緩和によってグローバルな過当競争に巻き込まれてきた。他方で、社会保障よりも大企業支援に優先して使われている税金の負担割合を増やされている。

国内に残っている産業や企業部門でも、経営の「効率化」が進む。人を減らし、残った労働者にはたくさん働かせ、中核的な人材以外は、賃金が安く、調整しやすい



けいけいばいり客の立ち並ぶ風景が日本の「田園都市」の現実だ

新規参入や料金設

(不要になったらすぐに辞めさせられる)派遣やパートなどの非正規雇用に入り替えることが当たり前となった。

そして、労働者をより安く長時間にわたって「効率的」に働かせることに先んじた民間が、今度は公共セクターに同じことをするよう迫っている。

光熱費や社会保障コストを安くしなければ海外に生産拠点を移す、という脅しも存在する。同時に、一部の企業は、この機に乗じて公共サービスの外部委託や経営権の獲得などを通じて、公共の土地やインフラを活用して利潤を上げようとしている。

しかし、すでに民営化と規制緩和が先行している公共交通はどうなっているのか。

儲からない地域や部門からの撤退によって、新たな交通弱者が生み出されているのではない。

実際、巨額を投じる高速道路の建設計画はあるのに、鉄道だけでなくバス便さえ途絶え、過疎化が止まらない地域がある。他方で、

定の自由化が過当競争を生んでいる地域や部門では、身体を壊すほど働いても生活できない労働者が増えた。安全が二の次にされることも多い。



佐野市の田舎地帯に忽然と現れるアウトレットモール

る若者の一人

働く農業労働者、工場労働者、介護・

確保のため

に、政府や大企業は、技能実習生制度や二国間の自由貿易協定(FTA)を通じて、いわゆる「単純労働」の分野に外国人労働者の参入を認めつつある。

介護や看護の現場では、賃金水準の低下が予想される。また、企業に農地を開放する政策を通じて、耕作されていない国内農地を耕すのは、企業に安く雇われ、マニュアルどおりに農業機械を操るサラリーマンになるかもしれない。

私たちは、消費者として広告に踊らされ、「安さ」と「便利」さを追求する生活が「豊か」な生活であると信じ込まされてきた。しかし、この「豊か」な生活を実現する過程で、私たちの仕事や労働そして生活にしろ寄せてきている。

中小の経営体は淘汰され、ますます少数の巨大企業によって、消費市場も労働市場も大きく再編されつつある。結果として、私たちの地域の食文化や生活文化、歴史、人間関係など大切な価値が、失われようとしている。その影響は、私たち自身の精神と身体にまで及んできているのではないだろうか。

大きな事件が次々と起きる現代において、これらの出来事の背後にある因果関係をていねいに読み解き、構造的・立体的に理解する時間的・精神的な余裕は、個人にも社会にもほとんどない。単に不安をあまり、安易な犯人捜しに終始する無責任な報道も、数多く見られる。

巨大化し、複雑化した現代社会を読み解くのは、むずかしい。しかし、たとえばそれぞれの事象で「結局、誰が一番得をしているか」という本質を押さえられれば、真実は意外なほど単純であることも多い。

そのような理解をもう一歩進めると、別々だと思われていたことが、実は密接に関係していたりする。総体的に物事をとらえれば、新たな社会のイメージもわいてくる。

(儲ければそれでいいのか)

永平寺線と春江以北廃止

京福部分存続案
組合型パターン

2001年11月7日(福井新聞)

首長会議
福井県
20



『電車なくすな』町民切実
京福三国芦原線存続に向けて「ガンバロー」を三唱する三国町民ら＝同町社会福祉センターで
2001年11月19日(県民福井)

えち鉄・三国芦原線LRT化

県都活性 切り札に

福鉄と相互乗り入れ



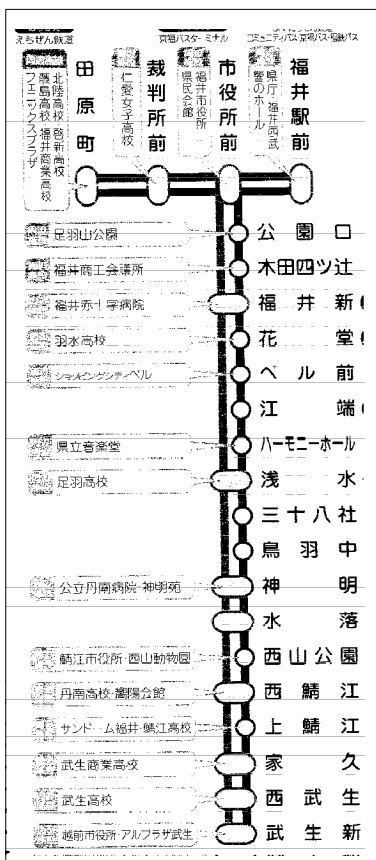
ほっとらいん35号(2002年1月1日発行)より

武生 福井

電車のある街づくり
もつと おしゃれに

ステキに

三国



▼議論がかわる

「再検討せよ」は、イコールえちぜん鉄道の高架乗り入れの見直しだとして、聞く耳を持たない状態が続きました。県側は「国との合意事項が、

しかし、私が言いたかったことは、「えちぜん鉄道の高架事業」ということが、新幹線福井駅舎整備予算化の絶対条件で、条件変更については、いっさい国との交渉窓口が持たないという中であれば、その条件の中でも、もつと将来のためにいい案はないか、考えようということなのです。

市内の年賀会で、福井市の坂川市長、山口市議会議長とお会いできたので、三国線だけを福武線に相互乗り入れさせることについて、お話しすることができ、県も提案を受け入れることとなりました。

その後、県が細部を検討したところ、新幹線駅部の負担軽減も混雑を避けるだけでなく、新たな用地買収も必要なくなるよう、予想以上の効果をもたらしました。実現に至るまでには、紆余曲折はあるでしょうが、三国武生へライトレールでつなぐことが基本方針となりました。

▼「お前たちが乗りたい電車を乗せてやる」と、わが家の小学四年の娘たちに、パソコンの画像を「うわすげえ」と歓声をあげた。オヤジは、その「うわすげえ」を走らせた。

当時の「ほっとらいん35号」の一面は次のような記事でした。あの頃の「ドラゴン危機一髪」怒りの鉄拳のような心境を懐かしく思い出します。

▼「永平寺線と春江以北廃止」(福井新聞01.11.2)の記事を見て、心臓が凍ったことを思い出します。「夢をあきらめない」、みんなの闘いの勝利が、次の夢を生んだといえましょう。

▼「永平寺線と春江以北廃止」(福井新聞01.11.2)の記事を見て、心臓が凍ったことを思い出します。「夢をあきらめない」、みんなの闘いの勝利が、次の夢を生んだといえましょう。

ました。

▼県の方針転換

そこで、私は提案しました。「最低でも、三国線だけは、田原町から福鉄(福武線)に乗り入れてできるようにすべきだ」と。

えちぜん鉄道の勝山線を、予定通り、現状路線を高架で乗り入れれば、国との約束も、福井市の高架事業も、勝山沿線の希望も、すべてクリアできる案です。

福鉄の経営問題も大きく浮上してきている中で、将来の経営統合も視野に入れた判断が必要となつていきます。えち鉄と福鉄の相互乗り入れは、利便性や快適さ、環境、まちづくりとの一体感も含め、将来性のあるベストプランだと思いました。

暗い議論が続いたので、表紙にフランスの低床式路面電車をカラーで印刷して「もつとおしゃれにステキに福井」と題して、一車より速く、快適で、おしゃれで、かっこいい、顔となる電車を走らせよう」と委員会に提案した。

夢があるから元気が生まれ、男(女)たちは立ち上がる。楽しい街づくりがはじまる。

やながわ 柳川の水路



新緑の眼

福岡県の南、柳川がある。柳川は水郷で、北原白秋を生んでいる。

この柳川も、都市化近代化によって、水道が普及し、水の利用も少なくなり、水路が一部埋め立てられたり、有害物質も激増して、人から背を向けられた時、救済策として、大部分の掘割を埋め、近代都市にふさわしいコンクリート張りの都市下水路にしてしまおう計画案がつくられ、市議会や県の承認も得て、補助金を受け、工費二十億円ですすめられることになった。

昭和五十二年、市長は施政方針で「柳川を近代都市にするため」とし、新たに都市下水係が新設された。その係長に任命されたのが広松伝。しかし、広松は、

「何がまちがえている」と思った。

柳川は市街地に掘割が造られたのではない。柳川が市街地を造ったのだ。

「柳川の水路は埋めてはならない」。

組織として決定し、議会も通り、県や国にも通っている事業であり、それを実行するために任命された係長が、疑問をもつて、思いあまつて、市長に直訴し、とにかく工事を六カ月猶予してもらった。

「水こそ、わが町、柳川のすべてであります。略 私たちは、川が汚れたら蓋をする、埋め立ててしまふ、あるいは下水道ととりかえてしまふということは、

汚濁や破壊にまかせることになることを自覚し、汚れた美しくする、壊れたらなおす、さらに汚さない壊さないの思想に戻らなければなりません」。

広松は、「郷土の川に清流を取り戻そう―柳川市民への呼びかけ」を書き上げ、市長もそれを取り上げた。「河川浄化計画」は、連日のように住民に説明され、市民たちは市の熱意に動かされ、若い職員は仕事の意義を感じ、率先して汚い仕事もするようになった。

「多くの困難があつたはずだが、あなたはどのようにしてそれを持ち越えたのですか」という問いに、広松は「私は心血をそそぎました」と答えたという。

よりよいものをつくるために、将来的なまちづくりにとって、何が最も有効か、どんなことが考えられるか、どんなアイデアがあるか、それをみんなで考えるから、まちづくりの思想が生まれ、熱意が生まれる。

「福井駅は何でもめているのか?」と聞かれる。「もめている」としか報道しない異常な状態では、発想の貧困化を招くだけだ。

(さいとう新緑のホームページ、「気まぐれ日記」より)

夢をあきらめない

よりよいものを求める姿勢

上の文は、さいとう新緑のホームページ、「気まぐれ日記」に書かれた、昨年十二月二十八日付けのものです。

県庁職員の中でも、結構、「気まぐれ日記」を読んでもくれている(チェックしている)みたいで、よく声をかけていたくことがある。

この日記は、ちょうど御用納め(今は仕事納め)で、私も議会事務局の仕事納め式に出席して帰ってから書いたものです。

内容を見ればお分かりのように、新幹線福井駅部の高架乗り入れ問題で、全員協議会を開く

も、知事が出席していないことなど冒頭から、荒れ模様の会議となり、質疑がなされたのですが、「できない」「むずかしい」「このままやるしかない」の一点張り、新聞は、「議会は何をやっているのか」という論調で書き、どこに行っても「何をもめているのか」だったことを嘆いて書いています。

そこで、ふと、そういえば、任

務を遂行するために、配置された一係長が、すでに議会で議決して国の予算までついたものをひっくり返した「柳川の水路」があつたなあと思つて、自然と筆がすすんだのです。

「できない」と言う前に、自分の胸に手を当てて、「もつといい方法はないか」を考えてみないか、ちよつと予算がかかるが、こういう案があるとか、この案は、住民を説得するのに時間はかかるが、できれば最高に素晴らしいとか、そうした提案がなぜできないのか。

その場しのぎではなく、将来的なことや総合的なことを考えれば、まずは、負担が大きくとも、全体がいきってくるプランをつくるために、なぜもつと汗をかかないのか。

いい福井県、いいまちをつくるのに、知事も議会も職員も猫も杓子もへつたくれもないだろう。みんな、考え、知恵を出し合うことを、まちづくりという

合うことを、まちづくりという

のではないかな。そんな思いがタメ息まじりになった。

▼そうしたところが、年明け、「先生のホームページの五万番目の来訪者は私です」という県職員にお会いした。「柳川の水路」を読んでもらったようだ。

最近では、行政改革、公務員改革、マニフェストによる目標管理など大合唱だが、大事なことは、もつといい方法はないか考え、意見を出し合い、実行する環境をつくることだ。

生き生きとした部下の芽を摘んでしまふような上司の器では、行事情化型の行政にしかない。

今回、えちぜん鉄道三国線と福井鉄道福武線の相互乗り入れ、LRT化を方針とすることが決まった。

「柳川の水路の係長」の仕事をしていた、「気まぐれ日記」読者の某氏たちの、ご奮闘に感謝申し上げる。

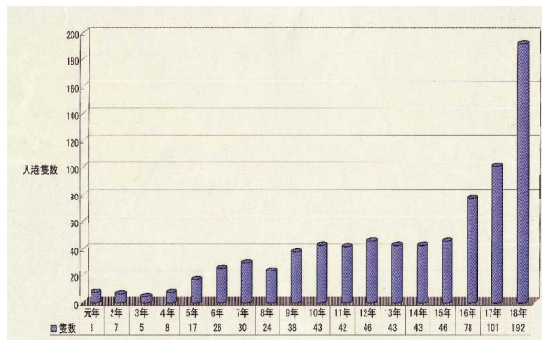


1996年12月18日(朝日)

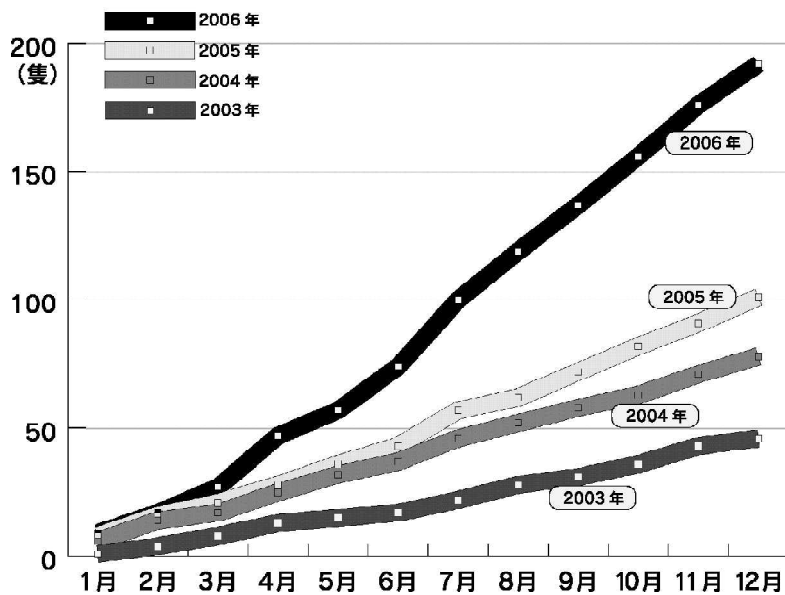
外航船
直接入港
利用促進に弾み福井港
4月に開港指定

2005年1月8日(県民福井)

福井港年別外航船入港実績



福井港の外航船入港隻数



開港指定の効果着実

福井港、外航船入港が倍増

2006年12月14日(県民福井)

地域を元気にする港

一昨年4月に開港指定を受け、海外からの船が直接入出航できる国際港になって、外国航路船舶(外航船)は、いきなり100隻を超え、昨年は192隻とあと一歩で200隻という状況となり、ほぼ倍増しています。

ん。

第二には「関連物流業種」に対する効果です。港に入ってくる貨物も港から出て行く貨物も当然ですが、陸上運送とは切っても切れない関係にあります。入港が増え取り扱う貨物が増えたことで、地元の陸上物流業に対する経済効果も大きいものがありました。

第三は、正に経済効果そのものですが、新たな車柄、機材、資材などの購買が活発になったことによる「直接的経済効果」も見逃せません。

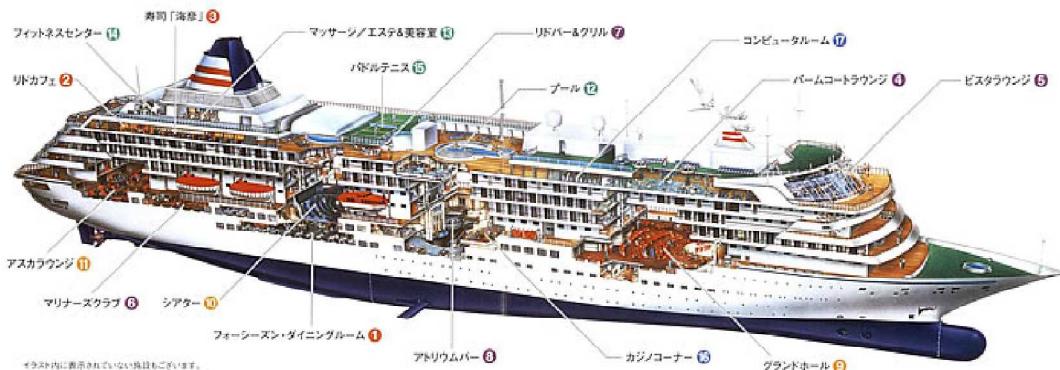
第四は、テクノポートへの企業進出です。昨年は、木材住宅用建材メーカーが進出してきました。港を利用する企業が来ることによって、港の活性化はもとより、雇用、税収など地域に大きく貢献してくれそうです。

このように、港が元気になるとは地元を元気にすることにつながるのです。

「開港」しても、関係者の努力がなければ、このような実績は残せません。次の目標に向かって更にがんばって欲しいと思います。

第一には「人」に対する効果です。港湾の仕事は過去に比べ飛躍的に機械化が進みましたが、やはり「人」がいなければ仕事になりません。4～5年前は、わずか40隻の仕事量がいまや200隻近くの仕事量になったわけですから「雇用の創出」による経済効果は計り知れませ

▼「釣り堀になった巨大な港」
「貨物船は来ず魚集まる」
「大型船は年2回」
よくまあ書いてくれたものです。朝日新聞(一九九六年)。重要港湾からの格下げを決定的にしたのですが、バネにさせてもらいました。感慨ひとしおです。



福井港発 第3回海外クルーズ 7.30(月)~8.1(水)



日本クルーズ客船(株) 殿
「ばしふいっくびいなす」



福井港開港を記念して開始した豪華客船による海外クルーズ(福井港・釜山)は今年で3回目。一年一回の定期便をめざし、石にかじりついても、みんなで定着化させ、国際港としての福井港を持つ市民として、釜山市との国際交流を深めていきたいと思います。昨年のクルーズで、釜山市観光協会に定期交流を求め、今年には釜山からの帰りの船に釜山観光客が二〇〇名程度乗船してくれることになりました。初の客船による「ビジット福井」です。是非、夏休みの旅行にご計画下さい。

Sねっと●レッド



衆議院議員

稲田朋美

VS

県議会副議長

斉藤新緑

「国を憂う」 ガチンコ勝負

●新緑の気ままにト〜ク

と き 2007年2月25日 13時半~
ところ 三国町社会福祉センター



主催・Sねっと● ご連絡先☎0776-82-1141

フサン
今年は釜山からもやってくる

傷だらけの人生

作詞 藤田まさと・作曲 吉田正

唄 鶴田浩二

セリフ 古い奴だと思いでしようが、古い奴こそ新しいものを欲しがるもんでございませう。どこに新しいものがございませう。生まれた土地は荒れ放題今の世の中、右も左も真暗闇じゃござんせんか。

(一番) 何から何まで 真暗闇よ すじの通らぬ ことばかり 右を向いても 左を見ても ばかと阿呆の からみあい どのに男の夢がある

セリフ 好いた惚れたと、けどものごつこがまかり通る世の中でございませう。好いた惚れたはもと「ころ」が決めるもの……こんなことを申し上げる私もやっぱり古い人間でござんしょうかね。

(一番) ひとつの心に 重なる心 それが恋なら それもよし しょせんこの世は男と女 意地が裂かれる 恋もあり 夢に消される 意地もある

セリフ なんだかんだとお説教じみたことを申して参りましたがそういう私も日陰育ちのひねくれ者、お天道様に背中を向けて歩く……馬鹿な人間でございませう。

(一番) 真つ平ご免と 大手を振って 歩きたけれど 歩けない 嫌だ嫌です お天道様よ 日陰育ちの 泣きごころ 明かすすぎます 俺らには

新緑の気ままにトク

▼「傷だらけの人生」は、レコードが発売されると忽ち一〇〇万枚を突破した歌である。

これを歌った鶴田浩二に「あの歌の歌詞は、君自身の気持ちのあらわれではないのか」と草柳大蔵が尋ねると、鶴田は「そのとおりだよ」と答え、歌の誕生の経緯を話してくれたという。

あるとき、鶴田と顔をあわせた作詞家の藤田まさとが、いきなり「鶴さん、今の世の中はおかしきんじやないかい」といった。

「おかしいし、腹立たいしよ」と鶴田が応じると、藤田は「おれもおかしいと思うんだ。今出来の歌の文句にはまるで詩がないよ。流行歌は大衆の心の詩だからね、今のような歌からは流行歌は産まれないね」と言葉を継ぎ、「いま、肚の中にあるものをぶちまけてみようじゃないか」と、うながした。

「なにからなにまで筋のとおりなことばかりじゃないか。我利我利者がからみあい、日本の自然を手前勝手にこわしてさ、国のことも民族のことも全く考えやしない」

「そうだな、男の夢っていうものがないよ」

「男と女だって、惚れたのハレたのって、すぐくついでしまふ。倦きればおさらばでね、耐える愛、というのがない。なにか開けつづいて、イメージネーション

を誘発するだけの美意識がないんだよ」

「そう、陰影というか、ニュアンスがないんだね。だから、人の心を察するとか、推し測るという人間としての高度な作業が見られないね」

「世の中、右をむいても左を見ても、真つ暗闇じゃないか」

ひとつの流行歌が、二人の男の「思い」から誕生したわけだが、これが爆発的にヒットしたのは、この男たちの「思い」と大衆の「思い」がびたりと重なったからだというわれている。

▼「私はバカです。と、首から看板を掛けて歩いているようなものだ」と娘の格好を見て叱つたという友人の話聞いて、どこの親も同じ事をいうもんだと妙に安心したりした。

「二十歳になったことを自覚し、自ら生き抜こうとする人を祝います日」として成人の日は制定された。

かつて、青年団長時代、二十歳になったことを自覚するな、親に連れられた七五三のような成人式ではダメだ。一度しか着ない



お前たちの時代は、大変な時代である。バラエティ番組とケイタイ電話で、毎日がデイズニランド気分、ボケくっついていて、いいように操られ、気がつけば戦争に駆り出されることになるか。

政治に背を向け、いい加減に、一票を投じれば、すべて自分にハネはね返ってくる。ウハウハ生きてウハウハ死んでいくような人生にはするな。人間には持ち時間がある。テレビから離れ、本を読め、じっくりモノを考えろ!



「新緑」が長たらしいからだろう、それが、酒でも入って呂律がまわらなくなると、「ロクさん」となる。シンリョクをシンロクと思ってしまう人もいからなのだが、「ロクさん」では、何か、長屋の「八つあさん」「熊さん」みたいだが、「ろく」ではないと言うと「ろくでなし」みたいだから、「ろく」でいい。

しかし、選挙の投票用紙に、「ろく」では困るので、せめて「さいとうせいろう」ぐらいまでにしてくれとお願ひしなければならぬだろう。

お元気になられ職務に復帰されてよかった。新春の年賀会で、硬直状況の福井駅部の乗り入れ問題を打開する案として、「三国線だけでもLRTを」という話をさせて頂いた。感度の良い人は反応も早かった。

かつての電車存続闘争の同士が、絶妙のタイミングで、復帰していたいて、また一つ夢が叶う。

ということで、今年のすべり出しは順調なのだが、雪の降らない気象異変、夫婦喧嘩も安心して出来ないバラバラ事件などの人間異変を考えると、人類が破局を迎える日も遠くないのかと幼子を見て気が滅入る。

女房に、「肩間に鍼を寄せて寝ている」と言われるのだが、原因を探求すると、行き着くところ「滅びの文明」にぶち当たる。

「とかく浮世を軽く見て」は、福沢諭吉の言葉、インケツ引いたような、苦虫つぶした顔にしても問題解決できるわけがなく、せめて気持ちだけは軽く持つて生きたいと思う。軽く生きた故、青島幸男を見習って。

二〇〇七年 立春を前に

